

充実した人生を送るために

後輩に伝えたいこと

【第49回】



中部大学教授

林 良嗣

柔道と海洋少年団の二刀流で人生が豊かに

柔道部と海洋少年団は、私の少年時代の主要な活動の場であり、この二つの場が私の精神世界を切り拓き、人格を形成し、人生を決定づけました。そこで人格者である師と素晴らしい仲間巡りに巡り合えたことは幸運でありました。出会った人々にとっても感謝しております。

プロフィール

林 良嗣 (はやし・よしつぐ)

1951年、三重県四日市市生まれ。東京大学講師、名古屋大学教授、英リーズ大学、独ドルトムント大学で客員教授などを歴任して現職。中部大学持続発展・スマートシティ国際研究センター長、名古屋大学名誉教授、ローマクラブ正会員・日本代表。

中国・清華大学客員傑出教授、中国・同濟大学世界交通研究センター長、ローマクラブ(本部・スイス、100名) 本部執行役員、世界交通学会(本部・英国、約1千名) 前会長・現COV ID-19タスクフォース委員長、日本工学会アカデミー(本部・東京、約800名) 元理事・中部支部長などを兼務。



昭和41年、三重県高等学校柔道大会1年生大会団体優勝の記念写真（前列右から3番目が西尾有賢師範、2列目中央が筆者）

師範を慕う父を見て柔道部へ

小学生の頃、家には「林五段」と刺繍された黒帯を巻いた柔道着が壁にかかっていました。私が柔道を志したのは、父、良一が三重県立四日市商業学校（通称・泗商）が在学当時の柔道の恩師、近藤善平師範を、引退後に住んでおられた滋賀県信楽に訪ね、慕い続けるのを見て、子どもながらに柔道は素晴らしいと思ったからだと思えます。明治40年（1907）生まれの父は泗商を卒業後、大正から昭和に移る頃に近藤師範の勧めにより講道館に入門し、その後

京都の武徳会へ移ります。この経歴は、父が他界した後に書店で偶然目にした小説『ヘーシンクを育てた男』（眞神博著）に描かれていたフランス・ポルドーの道場主、道上伯氏（父の5歳下）と同じで、もしかしたら二人は一緒に稽古をしていたのかもしれない。

私は、四日市の20校ほどの中学校の中で、柔道の実力がビリに近い山手中学校で柔道を始めました。ところが西尾有賢師範の指導する県立四日市高校柔道部に入ると、1年生大会団体戦で優勝し、自らも6回戦って5回の背負投一本勝ち、1引き分けて優勝に貢献しました。折しも、美空ひばりがヒット曲「柔」で「勝つと思うな、思えば負けよ」と歌っていました。西尾先生には「試合では、勝つと思え」と教えられ、すると一本を決め切れたのです。一番の思い出は、東海4県大会で当時15年連続で優勝していた東海高校の100キロくらいある選手に、62キロの私が大外返して一本を取ったことでした。なお、西尾先生は普段の練習では厳しく指導された上で、

外での試合では選手にすべてを託し、会場では一切声を出されませんでした。

高校で立ち技ばかりやっていた私が名古屋大学柔道部に入った初日、「お願いしなす」と乱取りに入ると相手が目の前から消え、見ると畳に転がって「Come on」とばかりに手招きしているのには、面食らいました。名大は、高専柔道を受け継ぐ寝技の達人、小坂光之介師範の指導を仰いでいました。井上靖氏が旧制第四高等学校（通称・四高）の柔道部時代を描いた小説『北海』にも大天井の名で登場する人物で、何度も四高を受験するも柔道に打ち込みすぎて失敗して断念した時に、柔道教師として採用されたという逸話の持ち主です。小坂先生が来られる日には、「研究」の時間があり、寝技での押さえや返しの支点と回転を物理学的、解剖学的に理路整然と解説され、また、井上氏らと過ごした四高時代の柔道と生活の話に魅了されました。高校、大学の同期、前後の部員には、将来それぞれ医師、エンジニア、都市計画家、国際開発金融機関である世界銀行の専



昭和41年、海洋少年団全国大会小樽大会における高等級カッターレースでスタート直前の四日市団チーム（右舷先頭の漕手が筆者）

門家などになった優れたメンバーがいまいた。

社会と人間関係を学ぶ 海洋少年団

小学6年生になって四日市海洋少年団に入団し、4級上で高校生の吉田耕太郎さんという先輩に出会いました。団を運営する大人に、吉田さんは正面から異議を唱えていました。聴いていると筋が通っており、先生（権威と体制）の言うことには従うものだと思いついていた私は、その勇氣に驚き感じしました。今日でいえば、気候危機に瀕して、大人の行動はおかしいと訴え

るスウェーデンの高校生だったグレタ・トゥーンベリさんのように見えました。

海洋少年団活動には、適切な手段と目標が与えられています。毎年夏休みに、全国百数十の団が集まる日本海洋少年団連盟全国大会が開催され、手旗信号、水泳、カッター（訓練用ボート）の3種類の競技があつて、これに勝つことが団員個人の目標となります。四日市団は、全国最多の団員総勢600名が一丸となって訓練に励み、総合優勝を重ねました。

一方で、上級団員になっていくと、団員を統率するマネジメントの任務が課されます。私も、中学生になると班長となります。10名ほどの班員の手旗信号、結索（ロープの結び方）の訓練を任せましたが、班員がついてこないのです。高校生になると隊長となり中学生の班長の統括を任せましたが、人望がないと批判される、という苦い経験をしました。遠征行事として、キャンプや海上保安部の巡視船に乗船して四日市から鳥羽まで往復200キロ近くの伊勢湾航海訓練も行われます。中学生の班長は、目

を離すとどこかに行ってしまう小学生たちを掌握し、高校生の隊長たちは600名の大集団全体がスケジュール通りに、しかも安全に統率できるように、事前に何度も集まり企画作りに侃々諤々の議論を行います。これらの経験は、リーダーシップの基礎能力を養う重要なトレーニングとなり、大人になつて国内外のさまざまな集団を率いていくために大いに役立ちました。

四日市独特の経験もしました。大気汚染、海域汚染の最も激しい四日市を、港でのカッター訓練を通して海から見てきました。1972年、大学3年生の夏、四日市公害裁判の原告勝判決の日、報道カメラの砲列の並ぶ津地方裁判所四日市支部の前を自転車で通つてカッター訓練に出かけると、魚がいなくなった四日市港の死の海はコーヒー色をしていました。しかし、判決が出てからは、環境基準を超える汚染物質を排出していると多額の罰金を取られたり、操業停止にも及ぶこととなりました。そのため汚染防止のための投資をする方が安上がりになつて、企業行動が180度転換さ



令和2年中部大学80周年記念・ローマクラブ日本共催シンポジウム「私たちは、ポスト・コロナをどう拓くのか？」での討議（画面に映っているのがワイツゼッカー名誉会長。舞台中央の向かって右から野中ともよローマクラブ会員、飯吉厚夫中部大学理事長、筆者）

柔道と海洋少年団の経験は 世界に通じる

れることになり、翌年には海に魚が戻ってきたのを目の当たりにしました。このような日本社会の大転換に遭遇したのも、海洋少年団に入っていたからであり、二度とあつてはならない社会問題の貴重な現場を体験したのでした。

私は、人と会うとすぐに親しくなるのが特技になりました。東大大学院で卓越した国際派土木工学者の中村英夫教授の薫陶を受けて以来、70歳になった今日まで、大学での都市や交通の研究、その実践への応用

として東京湾横断道アクアライン、東京と茨城県つくば市を結ぶ鉄道「つくばエクスプレス」、バンコク都市鉄道、インド新幹線の実現プロジェクトへの展開、そして70カ国から集まる世界交通学会や、人類のさまざまな問題を研究・啓発する国際的組織「ローマクラブ」などの活動を気おくれすることなく推進し、多くの友人を得ました。これには、柔道を練習することによって、人と親しく接しながら間合いを取る呼吸を体得したこと、また、海洋少年団で年齢や能力の異なる子どもたちの大集団をまとめ上げるマネジメントの体験をしたことが役立つと思っています。そのおかげで、中学を卒業したときには想像もなかった素晴らしい人々に巡り合い、人生が豊かになりました。

今、世界各国は互いにけなし合い、孤立しています。西洋思想中心につくり上げられた20世紀文明は、人類の危機となるまでの富の格差と気候変動をもたらしました。ローマクラブは、この問題に対処しようとしています。

嘉納治五郎かのうじごろう師範の掲げた精神「精力善用・自他共栄」は普遍的な意味を持ちます。他を思いやり、柔よく剛を制する柔道を志す者こそ、自然の偉大さを理解し、異なる人種や境遇の異なる人々を敬って繁栄を分かち合う、21世紀の世界が求める真のリーダーとなり得ます。ローマクラブ名誉会長のエルンスト・フォン・ワイツゼッカー氏は、市場原理主義がもたらした弱肉強食の世界を方向転換し、精力善用・自他共栄の精神に基づく「Judo Economy」を目指すべきではないか、とも述べています。

世界の資源、気候・災害、経済社会、人の健康のマネジメントが、国ごとでは対応不可能になった今こそ、柔道、海洋少年団のような自己研鑽けんさんを積む経験をした人が、国際協調のリーダーシップを取る時です。

このためには、勉強だけができる人では役に立ちません。私は、子どもたちが柔道や海洋少年団などの活動に飛び込み、国境を超えて友人をつくっていく力を養うことを奨励したい。日本政府も、国策の柱として支援してほしいものです。